

## 第1問

都合により問題の掲載はいたしません。

## 第2問

次の文章は、松村栄子の小説「僕はおぐや姫」の一節である。千田裕生と辻倉尚子は女子高校の同級生である。彼女たちは二人とも文芸部員で、自分のことを「僕」と呼んでいた。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

ぼくに与えられた

ぼくの日を

ぼくが生きるのを

ぼくは拒む

尚子の書いたそんな一節が、裕生を振り向かせたのは一年生の晩夏だった。それまで彼女たちは同じ部に属しながら、先輩たちの膨大な知識や醒めた思想、おとなびた物言い、それでいてちよつと子供っぽい感傷に魅了され振り回されて互に見つめ合うことさえしなかった。

けれども、十六歳の世をすねたような少女には、先輩のおとなびた言葉よりはずっと尚子の言葉の方が(ア)身の丈に合っていた。裕生は尚子の言葉に注意を払うようになった。

その冬に批評会をかねた合宿が行われた。予定をこなしたあとの雑談は文学談義になるのが常だった。その日も各自がてんてきばらばらに好きな作家、好きな作品をあげて語り始めていた。先輩の誰かが与謝野晶子だと言いつ、誰かが西脇順三郎だと言いつた。十数名の部員がいた。太宰が上がり、三島が上がり、ヘッセもカミュもワイルドも上がった。

尚子が何と言ったのか裕生は思い出せない。尚子は終始うつむいて、眠っているのではないかと思うような態度で(一年生にしては少しふてぶてしかったかもしれない)耳を傾けていた。尚子が促されて何かを言ったとき、A ああ、やっぱりそうだ、と妙に納得したことだけを覚えてる。

裕生は何と言ったのだったか……裕生が尋ねられたときには、すでに彼女の知る作家たちはあらかた出し尽くされていて、戸

惑つて……〈かぐやひめ〉だと彼女は言った。

「竹取物語？」

「いいえ、〈かぐやひめ〉の絵本です。朝倉<sup>せむ</sup>撰の挿絵のある紫の表紙の。幼稚園<sup>こよう</sup>の頃、僕はどうしてもそれが欲しくて……」

皆と似たりよつたりの答えをするのが嫌だったのかもしれない、<sup>(注1)</sup>インテリぶるのが気恥ずかしかったのかもしれない、とにかくその絵本がどのように美しかったか、三年目の秋には去らなければならないかぐや姫の運命がどのように自分を胸苦しくさせたかを裕生が居直つて話し始めたとき、尚子は顔を上げて裕生を見た。

ふたりは語り始めた。どちらも積極的<sup>(イ)</sup>に人に近づいていく性格ではなかったから、会話は弾まず、<sup>(イ)</sup>おずおずとした調子のもので、機会もそう多くはなかった。たまたま部室でふたりきりになったとき、あるいは、部員をまじえて談笑している中でさりげなく語った。普通ならば二、三時間で済むような内容をほぼ一年かけて語り合つたのだとも言える。

どちらも語るよりは聞きたがり、それでいて心のどこかでは耳をふさごうとしていた。それを隠すようにことさら無邪気なろうとして失敗した。

<sup>(注2)</sup>「〈二十億光年の孤独〉を読んだ？」

「……うん。泣いた、僕」

<sup>(注3)</sup>「キルケゴールが……もちろん、読んだって半分もわからないんだけど……本を開いただけで苦しくなつて……」

「〈死に至る病〉〈わたしにとつての真理〉……僕らをひとことで殺す文句だ」

少なくともあの頃、裕生と尚子は似た者どうしだった。自分を溶かし出してしまうような光を恐れ、寧ろ輪郭をはつきりと描き出す影や、いっそのこと存在をかくまってくれる闇<sup>やみ</sup>を愛し、晴天の日よりは雨の日の方が機嫌がよかった。十代半ばにして生を疎み、白雪姫やシンデレラよりは<sup>B</sup>月に帰るかぐや姫に心を打たれた。可哀想<sup>かわいそう</sup>だと思つたのではなく、羨ま<sup>うらや</sup>ましかつたのだ。

自分を取り巻いている存在や思惑<sup>おもわく</sup>がうつつとうしくてたまらず、媚<sup>こ</sup>びない程度の微笑を愛用することで友人どうしの馴れ合い<sup>なれあひ</sup>からも反目からも器用に身を遠ざけていた。誰にも何も期待してはいけな<sup>い</sup>いと自ら戒め、相手の横暴は許しても、わかつたような

同情やいたわりには必ず冷笑で（ウ）一矢を報いずにはいなかった。

その実、心の中では自分にはないもののばかりを数え上げ、こんなにマイナス勘定の多い自分なら、いつそいない方が理にかなう  
と思い詰めて逃げ場所を捜していた。

誰にもそんな自分の思いがわかるわけではないとたたくに思い込み、自らの内面を隠蔽に隠蔽を重ねて隠しながら、でもほん  
とうはかくも心弱き者なのだと叫ぶために言葉を書き連ねるという矛盾を犯していた。どうにもやりきれない感傷と怠惰をもて  
あまし、もてあそび、真摯であつて不真面目だつた。

そんな者どうしが友情を結び合えるものだろうか。孤立を気取り、解釈されるのを何よりの屈辱と感ずる者たちが、もし双子  
のように似ていたとしたらそれはあり得ないだろう。だから彼女たちは理解よりも無理解を、寧ろ何かしら意見の対立を求めて  
喧き合い、はかばかしい結果を得ず、そしてある日ふと黙り込んだ。

ふたりの間には一冊の詩集があり、ひとつのセンチンスがあつた。

――夢は、たったひとつの夢は生まれなかつたという夢だから、贈られるのは嬉しいだろう。

その言葉は裕生の胸の中で、硝子の触れ合うような音を響かせた。透明できらびやかで、それでいて脆く哀しい響きだつた。  
徐々に音は高まり、胸を裂いていった。

状況が許せば裕生は泣きたかつた。胸の震えとでもいうものに身を委ね、切ない死の夢に吞まれて泣きたかつた。けれどそ  
うはさせないもうひとつの魂が、同じように今まさにこの夢に吞まれようとし、けれど自分の不在を夢みるのならまずその  
抹消を試みるべきではないかと自ら問いかけ、相手がそれを指摘しないはずがないと息を吞んで夢の前に立ちすくむ尚子の魂  
がそこにあつた。

C ふたりは、ふたりであるがために身をこわばらせて黙り込んだ。目を逸し合いながら、互いの胸がヒクヒクと震える音を

（注4）

聞いていた。その震えの中に、ありがちな自己陶醉のうねりと、高潔な魂を気取る虚飾の顫動とを同時に認めていた。より多く  
哀しめることを誇るような、より傷つきやすいことを言い訳にするような、まるで転んだだけで大声をあげて泣き叫びおとなの

庇護を要求する幼児のような浅ましさを相手の中に、そして自分の中に見いだした。

彼女たちは素直に感傷に浸れなかったことで互いの存在を憎んだ。憎みつつ、そこに転がったふたつの魂がなんと弱々しく、澄んだ感傷に包まれて蛙の卵のように見え透いているのだらうと知ってゾツとした。

この日、裕生も、おそらく尚子も、取り繕うのはおまえの役目だと言わんばかりの沈黙にどつぶりつかりながら、自分たちが平凡きわまりないひとりの餓鬼だと思ひ知らないわけにはいかなかった。

あれから裕生は《僕》を気取る自分の心情について考え始めた。もつと純粹でもつと毅然とした固有の一人称がほしいと思った。魂を、透けて見えても恥じない水晶のようにしたいと願った。

尚子の方は部会に出てこなくなり、会えばからからと空虚に笑うようになった。尚子の魂はくぐもつたベールに包まれ、三年になって同じクラスになってみると、**D** いっし彼女は《あたし》という一人称を身につけていた。

「言つてやればよかったのに、センダじゃなくてチダです。ユミじゃなくてヒロミですつて」

机の縁をつかむ佳奈の腕には男物の時計がぶら下がっていた。恋人どうしで時計を交換するのが流行っているらしい。

「名前、間違われるのつて一番腹立たない？」

「慣れてるから……」

太い銀色のバンドがルーズに掌の方まで落ちているのを眺めながら、裕生は言った。

「なるほど」

佳奈が手首を上げると、ジャラリと音がして今度は時計が肘の方まで移動した。何時だろう、と裕生は身を捻ってそれを覗き込む。

「自分だつて忘れちゃうことあるんだよ、名前。先生が間違えたつて仕方ないよ」

佳奈は肩をすくめ、すくめたついでに揉みほぐしながら、教室移動を促した。

センダだろうがチダだろうが、ユミだろうがヒロミだろうが、どうせ自分でつけた名前ではないと裕生は思う。自分だったら……自分だったら、名などつけないだろう。こんな何もないようなものに名などつけようもない。〈千田裕生という名は、まるで空の鞆かばんのようだ。持って歩けば言い訳は立つが中身はない、そんな気がする。〉

E 多分そんなとき、裕生は〈僕〉に、より同化するのだろう。〈僕〉と書くとき、それは、ひとつの目、千田裕生の肉体やうつとらしい思惑を離れたひとつの魂の視点だった。透明な視点。何者でもない僕。

女らしくするのが嫌だった。優等生らしくするのが嫌だった。人間らしくするのも嫌だった。どれも自分を間違つて塗りつぶす、そう感じたのはいつ頃だったろう。器用にこなしていた〈らしさ〉のすべてが疎ましくなつて、すべてを濾過ろかするように〈僕〉になり、そうしたらひどく解放された気がした。女子高に來ると他ほかにも〈僕〉たちはいっぱいいて、裕生はのびのびと〈僕〉であることができた。

要するに否定と拒絶からなる〈僕〉は、のびやかで透明だったけれど、虚ろうつろに弱々しくもあつた。

(注) 1 インテリ——知識層。インテリゲンチアの略。

2 二十億光年の孤独——谷川俊太郎の詩集名。詩集中に同名の詩もある。

3 キルケゴール——デンマークの思想家(一八一三—一八五五)。〈死に至る病やわたしにとつての真理はキルケゴールの言葉である。〉

4 顫動——ふるえ動くこと。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 11 ～ 13。

(ア) 身の丈に合っていた

11

- ① 自分にとってふさわしかった  
 ② 自分にとって魅力的だった  
 ③ 自分にとって都合がよかった  
 ④ 自分にとって親しみが持てた  
 ⑤ 自分にとって興味深かった

(イ) おずおずとした調子

12

- ① 気まずい感じ  
 ② しらける感じ  
 ③ ためらう感じ  
 ④ かたくなな感じ  
 ⑤ つまらない感じ

(ウ) 一矢を報いずには

13

- ① 無視せずには  
 ② からかわずには  
 ③ ごまかさずには  
 ④ 嘆息せずには  
 ⑤ 反撃せずには

問2 傍線部A「ああ、やっぱりそうだ、と妙に納得した」とあるが、裕生はどのように納得したのか。その説明として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 裕生は、尚子が他人に媚びたり安易に同調したりせず、自分の感性や意思を大事にする人だと納得した。
- ② 裕生は、尚子が他人とは異なる知的で大人びた物言いをし、現実的で醒めた思想を持つ人だと納得した。
- ③ 裕生は、尚子が他人の模倣をしたり周りの人と協調したりせず、天衣無縫で自由な人だと納得した。
- ④ 裕生は、尚子が他人の知識に影響されず、批判的で冷静な態度を崩さない超然とした人だと納得した。
- ⑤ 裕生は、尚子が他人とのつきあいを極力避けて、孤独に過ごす時間を好む思慮深い人だと納得した。

問3

傍線部B「月に帰るかぐや姫に心を打たれた」とあるが、どういうところに心を打たれたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① かぐや姫が、人間界で育ての親や多くの人々に愛されたことに感謝しながら、生まれ故郷である月に帰ることができたところ。
- ② かぐや姫が、人間界で多くの立派な地位の人たちに求婚されながらも、最後まで孤独を貫いて月に帰ることができたところ。
- ③ かぐや姫が、人間界における富や名声に未練を感じることなく、魂の純粋さを保ったままで月に帰ることができたところ。
- ④ かぐや姫が、人間界のしきたりや煩わしい人間関係から離れて、ひとり自分の居場所である月に帰ることができたところ。
- ⑤ かぐや姫が、人間界では美貌<sup>ひぼう</sup>のみが賞賛<sup>しょうさん</sup>されることに違和感を覚え、人間界とは価値観の異なる月に帰ることができたところ。

問 4

傍線部C「ふたりは、ふたりであるがために身をこわばらせて黙り込んだ」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

16。

- ① 裕生と尚子は二人とも同じ傾向の文学作品に興味を持っているものの、お互いに相手の考えや感じ方がわかりすぎるため、自由に意見を交わすことができなくなってしまったから。
- ② 裕生と尚子は二人とも自己の不在を夢みていたが、生からの逃避が実現できないことだとお互いにわかったため、それ以上夢について語り合うことができなくなってしまったから。
- ③ 裕生と尚子は二人とも相手の感性に共感を抱き合っているものの、結局はお互いにすべてを了解し得ないことが明白になったため、自分の気持ちを語ることができなくなってしまったから。
- ④ 裕生と尚子は二人とも高潔で繊細すぎるという似通った性格であり、お互いに傷つけ合うことを恐れたため、自分の気持ちを素直に伝えることができなくなってしまったから。
- ⑤ 裕生と尚子は二人とも生に対して同じ思いを抱いており、お互いに考えの甘さを見透かされていると感じたため、自分の感情をそのまま表現することができなくなってしまったから。

問5

傍線部D「いつしか彼女は〈あたし〉という一人称を身につけていた」・E「多分そんなとき、裕生は〈僕〉に、より同化するのだろう」とあるが、〈あたし〉と〈僕〉の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 〈あたし〉は私的な場で女性らしさを強調する意味で用いる一人称であるが、〈僕〉はあえて反女性的な存在であろうとして用いる一人称である。
- ② 〈あたし〉は女性としての意識を高めようとする意味で用いる一人称であるが、〈僕〉は周りの人より優れた存在であろうとして用いる一人称である。
- ③ 〈あたし〉は周りとの調和を保とうとする意味で用いる一人称であるが、〈僕〉は社会通念にとらわれない自由な存在であろうとして用いる一人称である。
- ④ 〈あたし〉は女性どうしの連帯感を得ようとする意味で用いる一人称であるが、〈僕〉は男性社会へより接近したいという願望を込めて用いる一人称である。
- ⑤ 〈あたし〉は親しい間柄であることを示す意味で用いる一人称であるが、〈僕〉は公的な場で相手との距離を置きたいときに用いる一人称である。

問6 この文章における表現と内容の特徴についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、

解答の順序は問わない。 解答番号は

18

19

。

① 「真摯であつて不真面目」といった矛盾する言い回しや、「理解よりも無理解を」といった対立する語が用いられることで、感情が両極端に揺れ動きがちな裕生の内面が生き生きと描写されている。

② 「状況が許せば裕生は泣きたかった」のように主として裕生の心情に焦点をあてて描かれているが、「そんな者どうしが友情を結び合えるものだろうか」のように別の視点からも描かれ、人物像が浮き彫りにされている。

③ 「硝子の触れ合うような音」や「夢の前に立ちすくむ」などの比喩<sup>ひよ</sup>的表現が多用されることで、登場人物の繊細で鋭敏な性格が鮮やかに印象づけられている。

④ 人物の容姿や行動の描写が少なく、「自己陶醉のうねり」「抹消を試みる」などのような観念的な言葉が多用されており、登場人物の心の動きが具体的に描き出されている。

⑤ 冒頭の詩では「ぼく」が各行の初めに置かれて強調されているが、以降の文章では「ぼく」という一人称より、女性であることにこだわっている裕生と尚子の姿が表現されている。

⑥ 会話文中に「……うん。泣いた、僕」のように「……」が使用されることで、裕生と尚子の会話に余韻が与えられ、二人が徐々に親交を深めていく様子が細やかに写し出されている。

### 第3問

次の文章は、木下長嘯子『うなる松』の一節である。筆者（翁）の十七歳になる娘は四月から病の床にあり、回復の兆しも見えないまま、新年を迎えた。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

昨日といひ今日と暮らすほどに、いつしか年も返りぬ。睦月（注1）は事立つとて、人ごとに気色異なる装ひども響きののしれど、この人のいとどなやましく、うたてあれば、耳のよそにて、「いかにせん、いかにせん」と（ア）あから目もせず、つと添ひつつ嘆くよりほかのことなし。軒端の梅の、かつ咲きそめたるを、女の童（注2）折（わ）りて、「君（注2）ならでは」と見せたりしかば、顔近く引き寄せ、「うれしげにも咲きたる花かな。色よりも香こそあはれなれ。我はかく、今日明日とおぼゆるを、げにこの世のほかの思ひ出これなら（a）んかし。桜はまだしくて見ざらんぞ口惜しき」など、（A）思ひ入れたる顔のにほひ、あらぬ人なれど、さすがになつかしからずはあらず。

如月（注3）の中の五日にや、いまはの際と見えし。たれたれと人あまた呼びすゑ、つゆの形見も置かんと、手馴（てな）れし調度、何くれとはかなきもて遊びまで、数々に取り出（い）で、似つかはしくそれぞれにと配りつ。久しく宮仕（注3）へしうなゐの近くあるを見やりて、戯れながら、「日ごろはとかく苛（さい）み、遊びがたきにせしを、憂くもむつかしくも、さぞ思ひつらめ、されど我なくは、『いづちおはしけん、あはれ』と偲（しの）ぶ時もあらんかし」と言ふを、聞く人みな肝（きも）魂（たま）も消え失（う）せぬ。（イ）いかなる岩木もえたふまじく、上中下声をあげて等しく、さと泣きけり。翁と母、手を捕らへて、呼び生け呼び生け、「なほ言はまほしから（b）んことあらば、のたまへ。心のうち晴るけやらぬは罪深し」など言へば、うちうなづき、「我をば煙となし給（たま）ふな。それなん心にかかる。先立ちて二人の親に嘆かせたてまつらん心憂さ、黄泉路（よみぢ）もやすくは行きやられじ。また病ひ少し緩みある折々は、辞世の歌、心にかけしを詠みおかず成りぬると、姉君の（ウ）ただならずおはして、近きほどに生ませ給へらん稚児の、めづらかにをかしからん顔つき見ずなりなん、いとど残り多かる。さならでは何の思ひおくことあらん。かまへて亡骸（なきがら）を損なはでをさめて（c）ん。（B）もしたがひもぞする」とうしろめたげなり。「さればよ、心やすくおぼせ。この山の外へは出ださじ。塵灰（ちりはい）ともなさで、つねに君たち具して遊

(注4)

ばしつる<sup>きよくたう</sup>挙白堂のそこそこに葬<sup>はうむ</sup>るべし。翁、物学びうち休むかたなれば、なくてもわが傍らは離れじ。苔<sup>こけ</sup>の下にもさ思ひ給へ。遺言ゆめたがへじ」と誓ひ言へば、喜びて、「願ひ、今は満ちぬ」と手を合はす。ものなど言ひ止<sup>や</sup>みて、つゆまどろみ入りたるに、いささか気色直りて蘇<sup>よみがへ</sup>りぬる心地しながら、なほ頼むべきものにはあらず。

四、五日ありて、初桜の面白きを人のもとよりおこせたるに、とく、ゆかしがりつるものを見せ<sup>d</sup>んと、花瓶<sup>はながめ</sup>に挿しおきたれば、うちながめて、「<sup>C</sup>はや咲きにけり。春のゆくへも知らぬ間に」と、言の葉ごとに偲<sup>おも</sup>はるべきふしをとどめ、はかなき筆のすさみにも、あはれなることをのみ書きおけるは、長き世の形見にも見よとなるべし。つひに弥生<sup>やよひ</sup>の中の五日、浦島が子の箱<sup>(注5)</sup>開けしくやしさ、何にか似ん。遺言たがへず、かの堂のうちにをさめ、跡とふわざなど営むを、とまりて見る老いの命、返す返すつれなし。

(注) 1 事立つ——普段とは違う特別なことをする。

2 君ならでは——「君ならでたれにか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」(『古今和歌集』春上、紀<sup>き</sup>友則<sup>のともり</sup>)を踏まえている。

3 宮仕へしうなる——筆者の家に仕えてきた子ども。

4 挙白堂——京都の東山にあつた筆者の別荘。

5 浦島が子の箱開けし——「くやしさ」という語を導くための修辭。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20  
～  
22。

(ア) あから目もせず

20

- ⑤ ④ ③ ② ①
- よそ見もしないで  
泣きはらすこともなく  
一睡もしないで  
注視することもなく  
周りの目も気にしないで

(イ) いかなる岩木もえたふまじく

21

- ⑤ ④ ③ ② ①
- どんな強情な人も、我慢できなくて  
どんな頑強な人も、我慢できそうになくて  
どんな薄情な人も、こらえることができなくて  
どんな非情な人も、こらえられそうになくて  
どんな気丈な人も、こらえきれなくて

(ウ) ただならずおはして

22

- ⑤ ④ ③ ② ①
- みごもっていらつしゃって  
特別に喜んでいらつしゃって  
病気でいらつしゃって  
悲しんでいらつしゃって  
高貴な身分でいらつしゃって

問2 波線部 a↘d の「ん」の文法的意味の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

23。

- |   |   |                     |   |    |   |    |   |    |
|---|---|---------------------|---|----|---|----|---|----|
| ① | a | 婉曲 <sup>えんきよく</sup> | b | 推量 | c | 勧誘 | d | 意志 |
| ② | a | 推量                  | b | 婉曲 | c | 勧誘 | d | 意志 |
| ③ | a | 推量                  | b | 意志 | c | 婉曲 | d | 勧誘 |
| ④ | a | 意志                  | b | 婉曲 | c | 勧誘 | d | 推量 |
| ⑤ | a | 婉曲                  | b | 推量 | c | 意志 | d | 勧誘 |

問3 傍線部 A「思ひ入れたる顔の」にほひ、あらぬ人なれど、さすがになつかしからずはあらずとあるが、この部分の解釈とし

て最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 24。

- ① 花に思いをめぐらせている娘の顔の様子は、病気のためまるで別人だけれども、やはりいとしく思わずにはいられない。
- ② 死を意識して悲しみに沈んでいる娘の顔の様子は、命のない人のようだが、それでも心がひかれずにはいられない。
- ③ 女の童を思いやる娘の顔色は、病気のせいで以前と同じ人とは思えないが、やはりかわいいと思わずにはいられない。
- ④ 梅の花の色香を深く味わっている娘の顔の様子は、病人とは思えないけれども、やはり心配せずにはいられない。
- ⑤ 過去の思い出にひたっている娘の顔色は、病気のため本人でないようだが、それでも慕わしく思わずにはいられない。

問4 傍線部B「もしたがひもぞする」における娘の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は

25。

- ① 火葬により生前の姿を失い、煙となってこの世から消えてしまうことが何よりも気がかりだという気持ち。
- ② 慣習に従わなければならないとはいえ、親がわが子を火葬するという行為はやはり恐ろしいと思う気持ち。
- ③ 両親に自分の亡骸を火葬させ、そのうえこの山荘の外に墓を設けてもらうのは申しわけないという気持ち。
- ④ 火葬してほしくないという願いを告白したものの、それが両親をさらに苦しめてはいけないと思う気持ち。
- ⑤ この世に思いを残したまま火葬されると極楽往生できなくなると知って、心配になってきたという気持ち。

問5

傍線部Cの「はや咲きにけり。春のゆくへも知らぬ間に」は、「たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし桜もうつろひにけり」(『古今和歌集』春下、藤原ふじわらのよるか因香)という和歌の表現を踏まえている。これを参考にして、娘が言い表したかったことの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

- ① 自分が気づかない間に桜が咲いていたのだという感慨と、春霞はるがすみがたちこめるころが命の限りだと言われていたので、春の移り変わりを最後までは見届けられないだろうという思い。
- ② 心待ちにしていた桜が咲いていたのだという感慨と、病気のため部屋にこもっているので、春の移り変わりを肌身に感じられないまま、やがて命を終えてしまうだろうという思い。
- ③ 桜が咲いたことにまったく気づかなかったという失望と、その桜が春の移ろいとともにやがては散ってしまう運命にあるのに、それを知らずに咲き誇っていることをあわれむ気持ち。
- ④ 自分が気づかない間に桜が満開になっていたのだという驚きと、今を盛りと咲き誇っている桜もやがては散ってしまうように、若い自分も次第に年老いてしまうだろうという思い。
- ⑤ 自分が気づかない間に早咲きの桜が咲いたのだという驚きと、暗い気持ちで部屋に閉じこもっていたため、心待ちにしていた春の到来にもまったく気づかなかったことを悔やむ気持ち。

問6

本文の内容に最もよく合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

- ① もともと親しい仲ではなかった女の童と娘が交わすほえましいやりとりは、いつも周囲の重苦しい気分を和らげていた。しかし娘の死後はそのような何気ない場面場面が、筆者にはかえってつらい思い出として蘇<sup>よみがえ</sup>ってきた。
- ② 娘は死が目前に迫ったことにとまどいながらも、その心境を古歌を踏まえた典雅な言葉で巧みに表現してきた。そのような優れた素養を持ち合わせながら世を去らなければならなかったことが、筆者には何にもまして残念に思われた。
- ③ 娘は臨終の間際に、気分がよい時に辞世の歌を詠み残せなかったこと、姉の子供の顔が見られないだろうことが心残りだという内容の書き付けを残していた。娘の死後それを見出し<sup>いだし</sup>た筆者は、あらためて運命の無情さを感じた。
- ④ 花や周囲の人々へのこまやかな愛情を最後まで失うことなく、娘はあまりにも若くして亡くなってしまった。それだけに、娘の言動の一つ一つがかげがえのない思い出として蘇り、筆者は後に残されたわが身をむなしく感じた。
- ⑤ 娘は長い闘病生活のために少しやつれて見えることもあったが、その言動には少女のあどけなさが残っていた。それを出すにつけても、筆者は自分の余生と彼女の命とを引き替えられればよいのと思わずにはいられなかった。

# 第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(設問の都合で送り仮名を省いたところがある。)(配点 50)

(注1) 胡子夜臥<sup>スルニ</sup>有<sup>リ</sup>鼠<sup>ねずみ</sup>嚙<sup>か</sup>于<sup>ニ</sup>案<sup>つくえ</sup>其<sup>ノ</sup>声<sup>こゑ</sup>磳<sup>たたく</sup>磳<sup>たたく</sup>然<sup>タリ</sup>胡子懼<sup>おそ</sup>鼠<sup>る</sup>之<sup>ノ</sup>傷<sup>やぶ</sup>其<sup>ノ</sup>

書<sup>ヲ</sup>也<sup>ヤ</sup>乃<sup>チ</sup>暗<sup>ニ</sup>投<sup>ズルニ</sup>以<sup>テ</sup>杖<sup>つゑ</sup>杖<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>中<sup>あツルニ</sup>鼠<sup>ニ</sup>鼠<sup>しばら</sup>暫<sup>ク</sup>止<sup>ヤメテ</sup>而<sup>テ</sup>復<sup>マタ</sup>作<sup>ナス</sup>遂<sup>ニ</sup>命<sup>ジテ</sup>童子<sup>ニ</sup>

起<sup>キテ</sup>而<sup>テ</sup>逐<sup>ハシム</sup>之<sup>ヲ</sup>鼠<sup>や</sup>稍<sup>かく</sup>竄<sup>ル</sup>去<sup>ル</sup>及<sup>ビ</sup>童子<sup>ノ</sup>就<sup>クニ</sup>枕<sup>ニ</sup>鼠<sup>イ</sup>復<sup>タ</sup>嚙<sup>ミテ</sup>不<sup>レ</sup>已<sup>マ</sup>時<sup>ニ</sup>狸<sup>り</sup>奴<sup>ど</sup>乳<sup>やしな</sup>

別<sup>ニ</sup>室<sup>ニ</sup>胡子度<sup>ニ</sup>鼠<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>去<sup>ル</sup>也<sup>ヤ</sup>於<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>童子<sup>ノ</sup>取<sup>ニ</sup>狸<sup>ヲ</sup>奴<sup>ヲ</sup>置<sup>ニ</sup>臥<sup>ニ</sup>内<sup>ニ</sup>

由<sup>リ</sup>是<sup>ニ</sup>向<sup>さき</sup>之<sup>ヲ</sup>磳<sup>タル</sup>磳<sup>タル</sup>者<sup>トシテ</sup>寂<sup>コエ</sup>不<sup>レ</sup>聞<sup>コエ</sup>矣<sup>ア</sup>噫<sup>ああ</sup>人<sup>ニ</sup>非<sup>ザルモ</sup>不<sup>レ</sup>靈<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>鼠<sup>ヨリモ</sup>制<sup>スル</sup>鼠<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>クセ</sup>

於<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>能<sup>クス</sup>於<sup>ニ</sup>狸<sup>ニ</sup>奴<sup>ニ</sup>狸<sup>ニ</sup>奴<sup>ニ</sup>非<sup>ザルモ</sup>靈<sup>ナルニ</sup>於<sup>ニ</sup>人<sup>ヨリモ</sup>鼠<sup>おそ</sup>畏<sup>レテ</sup>狸<sup>ヲ</sup>奴<sup>ヲ</sup>而<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>畏<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>然<sup>ラバ</sup>

則<sup>チ</sup>彼<sup>おの</sup>各<sup>おの</sup>有<sup>ル</sup>職<sup>ニ</sup>也<sup>ヤ</sup>君<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>居<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>職<sup>ニ</sup>者<sup>モ</sup>亦<sup>タ</sup>尽<sup>クス</sup>其<sup>ノ</sup>職<sup>ヲ</sup>而<sup>ニ</sup>已<sup>ミ</sup>矣<sup>ヤ</sup>

(胡儼『胡祭酒集』による)

(注) 1 胡子——この文章の筆者胡儼の自称。 2 磳磳——鼠がかかる音。

3 童子——召使いの少年。 4 狸奴——猫の別称。 5 臥内——寝室。

問 1 傍線部(1)「遂」・(2)「度」の読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。 解

答番号は

28

29

(1)

28 遂

⑤ ④ ③ ② ①

ただちに ことに さらにすでに つひに

(2)

29 度

⑤ ④ ③ ② ①

うれふる みる はかる わたる おそるる

問2 波線部(ア)「復作」・(イ)「復嚙」とあるが、その前後の状況を説明したものとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤

のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 30 ・ 31。

(ア) 復作 30

- ① たとえ当たらなくても、しばらくは鼠がかじるのをやめるので、胡子は再度杖を投げつけた。
- ② 投げつけられた杖をうまくかわすことができたので、鼠はたち以前のようにかじり始めた。
- ③ 杖が当たらないとわかると、鼠は逃げることをやめて、すぐにまたかじりだした。
- ④ 杖を投げつけられて、鼠はわずかの間かじるのをやめたが、ふたたびかじり始めた。
- ⑤ 杖は一度目は当たらなかったが、鼠が動きをとめたのをねらって、胡子はまた杖を投げつけた。

(イ) 復嚙 31

- ① 鼠はようやく童子の追及から逃れたが、童子が寝たふりをする、また何かをかじり始めた。
- ② 童子に追われた鼠は枕のかげに隠れたが、童子が枕に近づこうとすると、童子にふたたびかみついた。
- ③ 鼠はしばらく様子をうかがっていたが、童子が寝つくのを見届けると、また童子の枕をかじった。
- ④ 胡子は童子に鼠を追ひ払うよう命じたが、童子は眠ったままだったので、鼠はさらにかじり続けた。
- ⑤ 鼠はひとまず身を隠していたが、鼠を追ひ払っていた童子が寝ると、ふたたびかじりだした。

問3 傍線部A「命<sub>二</sub>童子<sub>一</sub>取<sub>二</sub>狸奴<sub>一</sub>置<sub>二</sub>臥内<sub>一</sub>」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 32。

- ① 童子が胡子の猫を受け取って、寝室の中へ閉じ込めた。
- ② 童子が胡子の猫をけしかけて、寝室の鼠を捕まえさせた。
- ③ 胡子が童子に指示して、寝室の中で猫を捕まえさせた。
- ④ 胡子が童子の猫をけしかけて、寝室の鼠を捕まえさせた。
- ⑤ 胡子が童子に指示して、飼っていた猫を寝室に移させた。

問4 傍線部B「寂不聞矣」という表現から、この夜の出来事は結局どのような終息したことがわかるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 33。

- ① 鼠の鳴き声がしなくなって、胡子はかえってさびしくなった。
- ② 鼠がいなくなつて、胡子はようやく安眠できるようになった。
- ③ 鼠を追つて猫もいなくなり、やっと別室は物音がしなくなった。
- ④ 鼠も猫も眠ってしまったので、童子も安心して床に就いた。
- ⑤ 鼠のかじる音は聞こえなくなり、猫も別室から出て行った。

問5 傍線部C「人非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>靈<sub>ニ</sub>於<sub>二</sub>鼠<sub>一</sub>、制<sub>レ</sub>鼠不<sub>レ</sub>能<sub>ニ</sub>於<sub>二</sub>人<sub>一</sub>而能<sub>ニ</sub>於<sub>二</sub>狸奴<sub>一</sub>」ことあるが、どのようなことを言っているのか。その

説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① 人間は鼠よりも賢くすぐれているのだが、鼠をおさえることができるのは、人間ではなくて猫である。
- ② 人間は鼠ほどすばしこくないので、猫を利用するのでなければ、鼠を追い出すことができない。
- ③ 人間は鼠よりも知能が発達しているのだが、猫を飼いならすようには、鼠を飼いならすことはできない。
- ④ 人間は霊長類の最たるものののだが、現実には鼠を支配することができないのは、人間ではなくて猫である。
- ⑤ 人間は鼠ほどずる賢くはないので、猫を捕まえることはできても、鼠を捕まえることまではできない。

問6 筆者の主張を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① 鼠を捕まえる猫も、鼠のいる部屋に置かなければ役に立たない。君子は、それぞれの能力と限界を見きわめて、適材を適所に配置するものだ。
- ② 人には人の、猫には猫の、それぞれ能力や本分がある。君子は、自分の役割をよく心得て、それを十分やりとげるように努めるものだ。
- ③ 鼠を遠ざけるには、杖を投げるよりも猫を用いたほうがよい。君子は、手段とその効果をよく見きわめて、最も効果的な方策を選ぶものだ。
- ④ 杖には杖の使い道があり、鼠を追ひ払うために使うものではない。君子は、道具の使い道をよくわきまえて、適切な使い方をするものだ。
- ⑤ 人間は、他の動物の上に立つ存在である。君子は、それぞれの動物の特性を活かして、その能力を十分に発揮させるようにするものだ。